

農業委員会だより

No.93
令和元年11月

あぜみち

主な内容

- スマート農業 1
- 人・農地プラン、地産地消 2
- 農林業センサス、農政課からのお知らせ 3
- 委員百景 3~4

農業の未来を変える！ 「スマート農業」

農業が抱える課題

農業従事者の高齢化と後継者不足
日本の農業従事者の6割以上が66歳以上です。このまま熟練者が農業をやめ、後継者がいなくなると、貴重な技や知識が途絶えてしまいます。

農家1戸あたりの作業面積の拡大
農業をやめる人が増えると、その田畑が農業を続ける人に集まるため、農家1戸あたりの作業面積が拡大します。今後は、広大な農地を少ない人数で管理できる方法が求められています。

「スマート農業」として先進的な技術が次々と実用化

ロボットやICT（情報通信技術）などの先端技術を活用し、省力化や高品質生産などを可能にする新たな農業を「スマート農業」といい、全国で実証実験が行われています。農作業の負担が軽減され、高品質な農産物が消費者のもとに安定的に届けられるよう、ロボットやドローンの開発が急ピッチで進められています。

農業経営の将来像 (水田作)

気候や天気など、様々なデータを収集・分析・活用

GNSS（全球測位衛星システム）等による位置データ、空撮によるセンシングデータを活用

新技術導入後の経営モデル

耕耘・整地

移植・播種

防除

水管理

営農管理

収穫



ロボットトラクター



自動運転田植機



ドローンによる農薬散布



自動水管理システム



営農管理システム



自動収量コンバイン

自動化技術の導入により労働時間を削減し、熟練農家以外でも操作が可能となることで規模拡大を実現

データをフル活用した効率的かつ精密な管理により単収が向上

単収の向上やスマート農機の導入による規模拡大・労働費の削減により、経営コストを削減

農業用ドローンを 使っています

関和 英之さん



主に米麦・野菜を栽培する関和さんは、農業の効率化に向け、昨年からのドローンによる農薬散布を開始しました。関和さんが購入したドローンは、散布幅約4メートル、1ヘクタールを約10分で散布が可能です。ドローンによる作業は、従来の防除作業に比べ体への負担も少なく、圧倒的な作業効率で、準備・片付け時間が短縮されたとのこと。

また、散布量が一定で無駄が少ないため経費削減にもつながります。作業効率が上がること、収穫量や品質の向上も期待できそうです。



「人・農地プラン」の実質化 地域農業の将来を考えよう!



後継者はいないし、自分が農業をやらなくなったらこの農地はどうなってしまうだろう?

もっと経営規模を拡大して頑張りたいけど、借りられる農地が見つからない。



地域農業をよりよくするには、現状を把握し、話し合いをして将来の方針を決めることが重要です。この話し合いの結果、地域の人・農地について将来の方向性を定めた計画を「人・農地プラン」といいます。

「人・農地プラン」の推進は、市町村と、農業委員会やJA、土地改良区、農地中間管理機構など地域農業に関わりのある多くの組織が一体となって取り組むことになってきます。

地域の皆さんがこれまで営々と築き上げてこられた地域の農業・農地、それを取り巻く伝統や文化、自然景観などと一緒に、次世代にしっかりと引き継ぐためにも、「人・農地プラン」の実質化が必要となります。話し合い活動については、詳細が決まりしだいお伝えいたします。皆さまのご理解とご協力をお願いいたします。

地域の農業をより良くするための5つのステップ

STEP 1 地域の人・農地の現況・将来についての聞き取り
【アンケートや戸別訪問による意向把握】
（「農地の利用状況調査」で実施済み）

STEP 2 把握した意向の集約
【地図化による現況把握】

STEP 3 話し合い活動の実施
【課題の共有】

STEP 4 地域農業のこれからについての将来方針を決定
【「人・農地プラン」の決定・実質化】

STEP 5 「人・農地プラン」の実行

地産地消

行田産長ネギを学校給食に

田代 直也さん(谷郷)



行田市の学校給食では、子供たちが旬の食材をおいしく味わえるように地産地消への取り組みをしています。今回は、今年11月から学校給食で使用されるネギを栽培する谷郷の田代直也さんを紹介します。

横浜市で生まれ育ち、建築関係の仕事をしてきた田代さん。東日本大震災の時、「買いため」などの影響で、小売店から食料品が全くななくなってしまったという体験から就農を決意。奥様の実家のある行田市に移住し、農業大学校卒業後、ベテラン農家さんの下での研修を経て、4年前に新規就農しました。

田代さんが栽培するのは、ネギ、



オクラ、ホウレンソウ、行田在来えだ豆など。市場に出荷したり、直売所で販売したりしています。就農当初は計画通りの出荷ができなかったのですが、地元の農家さんなどに支えられ、今では少しずつ納得できるものが栽培できるようになりました。丹精込めて作った野菜を「おいしい」と言ってもらえた時には、就農して本当によかったと思えるそうです。

田代さんがネギを栽培する面積は約60アール。学校給食には、献立にあわせ、1日100キログラム程(約6千人分)、3月まで約4トンのネギを出荷する予定だそうです。「ネギが苦手な子供が多いですが、おいしく食べてもらえるように心を込めて栽培します。」と笑顔で話します。今後の目標をたずねると、農業者として地域に貢献し、いつか、子供たちを対象とした農業体験会を開いて食の大切さを伝えたいという田代さん。行田市の農業を支える若手農業者として、とても頼りになる存在です。

2020年

農林業センサスに ご協力ください

令和2年2月1日(土)を基準日として、全国一斉に農林業の国勢調査といわれる「2020年農林業センサス」が実施されます。

5年ごとに実施されるこの調査は、わが国の農林業・農山村地域の実態を明らかにし、今後の農林業の政策に役立てることを目的としています。1月中旬以降、調査員が調査の対象となる世帯（組織）を訪問いたしますので、ご協力をお願いします。

なお、この調査は、統計法に基づく基幹統計調査として実施しますので、調査内容を統計以外の目的で使用することはありません。また、調査員には守秘義務が課せられているほか、記入していただいた調査票についても厳重に管理しますので、ご安心ください。

▼問い合わせ 企画政策課統計担当（内線310）



農政課からの お知らせ

野焼き

わらやもみ殻等の野焼きにより、火災への不安、煙と臭いによる不快感、煙による視界不良、洗濯物への煙の吸着による苦情が多数寄せられています。

土中の虫等の駆除には野焼きは有効な方法ですが、わら・もみ殻等は田畑へのすぎ込みや堆肥として活用するよう皆様のご協力をお願いします。

なお、農業のため止むを得ず焼却を行う場合は、大量の煙が発生しないように乾燥させるなど工夫し、周辺に配慮をしましょう。

第2回農業まつり

市内農産物・加工品および年末食品の展示・即売、抽選会を行います（抽選券は場内で買物をした方に配布します）。また、行田市農産物品評会も同時開催。多くの方のご来場をお待ちしております。

▼日時 12月7日(土)

▼場所 午前9時30分～午後3時
JAほくさい行田中央支店
広場

▼主催 行田市農業祭実行委員会、
JAほくさい行田中央支店

委員百景

農業委員及び農地利用最適化推進委員に自由な内容で寄稿して頂いたものを掲載します。

災害はいつでもやってくる



農業委員
島田 勇
(前谷)

2019年9月、地球温暖化対策について国連本部で「気候変動サミット」が開催された。原因とされる温室効果ガスの削減については、各国の表明している削減目標を合わせても「パリ協定」の実現は難しいようだ。

しかし今、異常気象により世界各地で様々な自然災害（豪雨による洪水、干ばつから大規模な山火事等）が発生して

いる。

日本でも最高気温38度超えが常態化し、猛暑日の連続記録が更新されている。また、最近の台風は、大型で強い勢力を保ったまま接近または上陸し前線を刺激して広範囲な地域に記録的豪雨をもたらしている。

このような自然災害は、人々の生活や農業に甚大な被害を与え、経済的損失は計り知れないものがある。農業にかかわるものとして非常に心が痛む思いである。

「災害は、忘れたころにやってくる」とは昔のこと。今は「災害はいつでもやってくる」と認識して生きる時代なのである。

スマート農業と中間管理事業



農業委員
新井 健一
(長野)

今年にはスマート農業元年と言われています。昨年のドラマ下町ロケットのように農業機械のロボット化が進んでいます。すでに、無人作業のトラクターやコンバイン、田植え機等を見た方も多数いらっしゃると思います。ここ北埼玉地区でも水稲一〇〇ヘクタールを超える規模の

経営をしている法人もあります。行田市の農地の受け皿の個々の経営体も年々規模拡大の方向になっています。しかしながら、農業環境のインフラを整備していかなければこれ以上の拡大はできないと考えます。数年前から中間管理事業が始まり、多数の農地が契約されました。なお一層農地の契約が進めば、農地の集約、1枚当たりの面積拡大等が望めます。そして、この集約拡大した農地を均平して無人の機械に働いてもらうわけです。

農業を取り巻く環境は難しいものがありますが、少しずつ良い方向になるように努めて参りたいと思います。



農家への思い



農地利用最適化
推進委員
椋田 佳克
(関根)

私の家は昔ながらの農家です。私は、小さな頃から家を守り、農業を継ぐと思っていました。

学校を卒業し、仕事も農業に関わる職業を選びました。仕事では、農家と話したり、農作物の栽培現場を見たりして、農業の楽しさや厳しさなど、直接話を聞くことができ良い勉強になり、

有意義な日々を過ごしていました。

今から6年前、地元では農業者の高齢化や後継者不足などが問題になりました。私自身、いつかは農業をやりたいとの思いがあったため、仕事を辞め、本格的に農業をやる決心をしました。

現在、水稲を中心に、季節に合わせた露地野菜を栽培し、JA直売所やスーパーなどに出荷しています。また、現在農地利用最適化推進委員、農協直売所役員としても活動しています。

今後、今までに仕事で得た情報や技術などを地元の方々に伝え、行田の農業に貢献できるように、日々努力したいと思っております。

農家としての私



農地利用最適化
推進委員
坂田 晃朗
(小見)

祖母がたった1人で続けてきた農業の後を継ぎ、10年が経とうとしています。最初は農業の右も左もわからぬ状態で1町程度の小規模零細から始まり、現在6町ほどの田畑を一人で耕作するようになりました。農業は儲かるのか？米農家の未来は？10年続けた今も

その答えはわかりません。ただただ日々の作業に追われる毎日です。

現在私の地域では不動産会社の参入によって太陽光発電のソーラーパネルや資材置き場などが増え、田んぼが減ってきており、変わりゆく風景を見て少し淋しい気持ちになります。そして、農家同士だけでなく、他業者との田畑の取り合いになってきているのが現状です。やはり農地はその地域に根差した者によって守られていくべきだと考えます。そういったシステムや法整備を期待しています。

これからのんびりマイペースに、かつ、徹底したコスト削減・省力化・多様化で、儲かる農業を模索していきたいと思っております。

就農時と現在



農地利用最適化
推進委員
田島 等
(野)

昭和54年に就農しましたが、父が病に倒れてしまい、米作りの技術を習得する事ができませんでした。経験が未熟だったため、地域の皆様や農機具屋さん聞きながら覚えまして。その頃は、農機具も乗用型が普及し作業も楽になり、定年まで兼業で働きました。その後は専業で野菜や米作りに励んでいます。

担当する南地区は、平成11年に圃場整備事業があり、作業性は良く、

作付けはほぼ100パーセントです。圃場整備事業がなされていない地区では、水の便が悪い所や、湿地帯のため作付けされていない農地も見受けられます。今後整備事業が予定されていますが、高齢化や後継者不足等で耕作の縮小や就農を諦める人が増えるのではないかと考えられます。

遊休農地を見かけた時、所有者にお話を聞き、受け手と利用調整した事例もあります。

これからも、所有者との話し合いや関係する機関と連携を取り、アドバイスを聞きながら活動をしていきたいと思っております。

農地利用最適化推進委員になつての思い



農地利用最適化
推進委員
浜山 陽子
(斎条)

私は、昭和39年に高校を卒業し、行田市農業協同組合に就職しました。市内各地区のたくさんの方と関わり、いろいろと勉強になったことがあります。米麦以外の酪農、果樹、

野菜栽培など、早朝から農家の皆さんが一生懸命従事している姿を見し、感銘を受けました。

現在では、農業従事者の高齢化や後継者不足、生活習慣の多様化により、消費者のニーズも大きく変化しており、それに対応した農業生産が今後求められてくるものと考えています。

今後は、効率的な農業生産を行い、農業所得の向上を図ること、田園風景を守りながら地域の活性化に結び付けよう、推進委員としてその一助になりたいと思っております。

【編集・発行】

発行日/令和元年11月(Na.93)
編集・発行/行田市農業委員会

〒361-8601 行田市本丸2番5号
TEL: 048-556-1111(内線391・392)
E-mail: nogyo@city.gyoda.lg.jp

題字写真：行田市制施行70周年記念事業「ラグビー日本代表応援田んぼアート Supported by リポビタンD」
左から、姫野和樹選手、リーチマイケル選手、田中史朗選手。